



2011年(平成23年)
12月号(No. 799)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

年次晩餐会、盛況のうちに開催へ

今年の年次晩餐会も425人の出席者のもとに、なごやかに開催されました。1年の締めくくりとして、華やいだ会になりました。新名誉会員の紹介や、会長による特別表彰もありました。高橋会報編集委員に報告してもらいます。

■425人が出席

平成23年度年次晩餐会は12月3日、東京・品川の品川プリンスホテル・アネックスタワーで開催された。皇太子さまがお忙しい公務のなか4年連続して出席されたのをはじめ全国から425人の会員が集い、歓談。希望に満ちた新しい年を迎えたいと祈った。實川欣伸会員が会長特別表彰を受けた。新入会員を代表して13歳の三上マリモさんがあいさつした。

■会長挨拶 4月に新法人へ移行

実に変な年だった。東日本大震災とそれに伴う原発事故は東北地方に壊滅的な打撃を与えた。深い傷跡を残したまま復興の見通しはたっていない。欧州の国家債務危機は、世界的な信用不安を引き起こし、さらに異常な円高を誘発して日本経済を深刻な状況に陥れている。

午後6時開宴。尾上昇会長は、あいさつのなかで、苦渋の一年を

目次

年次晩餐会、盛況のうちに開催へ	1
梅棹忠夫・山と探検文学賞授賞式	4
松本で「山岳フォーラム2011」	
「山の日」制定を強くアピール	5
「小島鳥水」レリーフが見つかりました!	6
東西南北	7
イタリア国立山岳博物館訪問記	
活動報告	8
集会委員会	
支部だより	9
千葉支部/福井支部/	
東海・関西・京都支部共催/東九州支部	
図書紹介	12
図書交換会出品目録および購入申込みの案内	14
会務報告	16
ルーム日誌	18
会員異動	18
新入会員	18
図書受入報告	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時
年末年始休室 12月29日~1月5日

振り返った。被災者への義援金に対する会員の協力を感謝。そして会の現状を次のように報告した。

「3月と6月の総会で公益社団法人への移行と定款変更を審議していただいた。10月24日に移行認定を内閣府に申請した。予定どおり進めば、来年4月1日に新しい公益社団法人として生まれ変わる。複雑な会計処理でご配慮いただきなければならぬが、支部の活動は、基本的にはいままでどおりだ。活性化し仲間を増やしていただきたい。そしてクラブライフを楽しんでいただきたい」

いつものように晩餐会のテーブルには「富士山」「北岳」などの山名がつけられた。皇太子さまは「富士山」のテーブルにつかれた。

■新名誉会員に室賀、平井会員

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は52人。1936年に日本初踏査隊「隊長としてインド・ヒマラヤのナンダ・コートに初登頂された堀田弥一名誉会員、福岡、東海支部の発展に尽力された松本恒夫・中世古隆司会員、事務局でお世話になった杉山都子会員ら。心からご冥福をお祈り申し上げます。

新名誉会員が紹介された。室賀輝男、平井一正会員のお2人である。室賀会員は長年にわたって越後支部長、新潟県山岳協会会長として山岳界の発展に寄与された。平井会員は58年、京大士山岳会隊員としてカラコルムに遠征、チョ

バルトロ・カンリ登山隊などを指揮し後輩の育成に尽くされた。

尾上会長が名誉会員章を手渡した。平井新名誉会員は「いつのまにか80歳になってしまった。美しいものに感動し未知なるものに心をとめかす。そうしていれば若さはついてくる。そのような気で後輩の育成に力を注いでいる」などと話した。

■新永年会員は40人

新しい永年会員は40人。うち16人が出席した。61年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、会員として活躍された。会員番号は5238から5383。所得倍増計画による高度経済成長の真っ只中だった。

■新永年会員(会員番号順)

高橋博、山崎智弘、田辺昭雄、向井裕彦、近藤暉、桑田結、船木匡、平野征人、若浦義弘、三留仁、野村孝義、杉山正洋、園川陽造、高澤光雄、薬師義美、金井健二、山本祝、遠藤禎一、山内敦人、川口俊幸、松永康子、二本節夫、池場孝昌、浅利欣吉、田村将、沖充人、大須賀浩、渡辺照人、浅川瑞穂、高橋庄一、室次雄、上野康二、平野明、白石裕、上尾庄一郎、齋

藤惇生、赤松功也、小貫伸一、建石八重、千葉重美

新永年会員を代表し、田村将会員が挨拶した。出席したなかで一番若い会員である。「これから新しいものがどんどん出来ていくという時代だった。夢と希望に満ちていた。山が好きで、大学に入ってから最初に行ったのは山岳部の部室だった。3年目に日本山岳会・越後支部に入会した。大学は8年かけて卒業すればいいというようにのんびりしていた。それで許されし、就職もできた。優雅な時代だった。ことし7月に71歳となった」などと振り返った。

■實川会員に会長特別表彰

会長特別表彰の受賞者として、實川欣伸会員が紹介された。尾上会長が「ビックリ仰天。ぜひ表彰の理由を説明したい」とマイクを握り締めた。「去年、富士山への1000回登山を達成された。ことし10月には、1111回となった。1日2回登るのは当たり前、1年間に200回も登った。それが4年も続いた。目標は2230(ふじさん)だそう。ぜひ達成してもらいたい」と二気に語った。實川さんは「自分でも信じられ

ないくらい」と応えた。日本橋からスタートすると43時間で富士山頂にたどり着く。海岸から村山古道を通って18時間で登る。4つのルートを使うのは一筆登山。親不知からは北・南アルプスを縦走し29日かかった。大阪・天保山から東海道を歩いて富士登頂を果たした、という。体力もさることながら、その精神力にだれもが驚嘆した。大きな拍手が巻き起こった。

■新会員169人、13歳代表がはいさつ

続いて新入会員の紹介。ことしは169人が新しく会員に加わった。昨年は142人、一昨年は104人だった。増加傾向にある。これが定着してほしいと願った。うち36人が出席した。

会場が、またもビックリした。

代表して13歳の三上マリモさん(中学1年、宮城支部)があいさつした。日本山岳会のなかで最年少だ。再び大きな拍手が巻き起こった。

三上さんは「父と活動しています。宮城のオポコンベン山で岩登りに興味を覚えました。四季それぞれに違う山の景色、美しさに出会っていると感動します」とスピー

チした。

恒例の鏡開きは、皇太子さま、尾上会長のほか平井新名誉会員、山崎幸和越後支部長(室賀新名誉会員代理)、山田二郎名誉会員、谷垣禎一会員の6人で行なった。お酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。いっ

もながら感謝したいと思います。齋藤惇生名誉会員の音頭で乾杯した。会食が始まった。メニューには、雪山の憩い、山の恵み——などと、シェフからのメッセージが添えてあった。会食をはさんで、高橋二義宮城支部長があいさつ、東日本大震災の義援金に対するお礼の言葉を述べた。「会員みなさんの温かさ、組織の力をこれほどまでに感じたことはない」と語った。

■支部紹介、「四国」設立へ

全国30支部の会員の紹介があった。恒例のイベントだ。支部の動きがそれぞれに活発だ。北から南へ参加者は紹介されるたびに立ち上がりナブキンを振った。

宮城は全国支部懇談会を栗駒山で行なった。来年は千葉が10月に予定。福岡は自然保護全国集会を実施。東海で支部創立50周年、福井で20周年記念式典を開催し



ナムナニ峰末路の南面から初登頂、初縦走に成功した平出・谷口ペア

た。

分水嶺・分境嶺踏査は、北海道がオホーツク分水嶺、東京多摩が都県分境嶺、関西が近畿分水嶺で、森づくりは、青森の白神山地ブナ再生事業、岐阜が権現の森など。

石川はふるさと登山道を整備。「山の日」PRを兼ねて清掃登山を岩手・岩手山、福島・安達太良山、栃木・日光の山、北九州・九重連山など。

先人祭は、越後・高頭祭が54回、信濃・ウェストン祭が65回、山梨・深田祭が30回、富山・播磨祭が26回を迎えた。

公募登山を山形が月山で、茨城は県自閉症協会に協力し登山、静

岡はハイキング・セミナー、広島

の登山教室は受講者780人に。最後に、全国31番目の支部として「四国支部」の設立が紹介された。来年3月までには発足の予定だ。晩餐会には5人が出席し、大きな拍手で歓迎された。

■海外登山報告会

晩餐会に先立ち、午後2時から海外登山報告会があった。ダッドメイン東壁とナムナニ峰は、日本山岳会海外登山基金の助成金を得て行なった登山の報告である。

インド・ヒマラヤ登山の軌跡―東海支部中高年登山隊の記録(報告・鈴木常夫、星一男)

東海支部は88年、中高年会員の増加に対応し「実年登山隊」をインド・ヒマラヤに派遣した。以来23年間にわたってインド・ヒマラヤの6000メートル峰に14隊を派遣し、目的の山すべてに登頂した。今回は、支部創立50周年記念事業としてラホール・スピティ山城の未踏峰(6105メートル)をめざした。隊員6人、平均年齢65歳だった。現地語で双耳峰を意味するチェマ・ピークと命名した。

中国四川省ダッドメイン東壁初登攀(報告・増本亮、長門敬明)

ギリギリボーイズトリオが中国ミニヤコンカ山群のダッドメイン(6380メートル)に挑戦した。予定していたエドガー東壁は落石が多く断念。高所順応中にダッドメインをみつめた。モレーンの手前、4100メートルにBCを設置した。雨が実によく降った。ビバーク・停滞を繰り返して6日目に登頂し、15回の懸垂下降で帰還した。高度差1900メートル。

この登攀で第6回ピオレドール・アジアにノミネートされ、新設されたゴールデン・クライミング・ブーツ賞を受賞した。

チベット・ナムナニ(納木那尼峰(7694メートル)未踏の南面踏査と縦走登攀(報告・谷口けい)

未だ足を踏み入れた記録がまったくないナムナニ峰南面のロングゴー谷を遡る。当初は南東壁に登るつもりだったが、頂上稜線の懸垂氷河の状況が危険であるためルートを変えて南面に変更。10月5日にBCを出発する。5日間の登攀で10月9日、ナムナニ南面から南峰への初登頂を果たした。山頂からは聖地カイラスが望めた。本来は登ったところに下りるのが原則だったが、安全なルートとして北

面のノーマル・ルートを下った。「縦走できたのがうれしかった」などと話した。

■フォトクラブが20周年展示会

展示会場では、同好会「アルパインフォトビデオクラブ」が創立20周年を迎え、記念展を開いた。月例会、撮影会、写真展、研究セミナーなどを随時行なっている。ことし内外で撮影した秀作41点を展示し「20年の歩み」をパネルで紹介した。パネルには「この間、カメラ機材はデジタル時代に移った。しかし、自然の美しさは変わらない。山を撮る人の心も変わらない」とあった。

会場入口に皇太子さまが出席された写真が飾られた。「ケニヤ山の黎明」と題されている。昨年3月、ガーナ、ケニヤを訪問された。ケニヤ山には中腹から山麓にかけて氷河が点在している。サバナの奥に輝く美しい高峰だ。大地はまだ眠っている。希望に満ちた朝が明けようとしている。全倍という大きなサイズに引き伸ばされている。夜明けの空のグラデーションが素晴らしい。

(文・高橋重之)

カルチャー

梅棹忠夫・山と探検文学賞授賞式

沖津文雄

本会名誉会員であった梅棹忠夫を冠した文学賞が昨年制定され、その第1回受賞作の授賞式が11月2日、長野市で開催された。

生態学者として、また探検家として多くの業績を積み上げられた梅棹忠夫は、組織経営者として、あるいは指導者としてもその功績が広く知られている。登山や探検は、本人も語っているように、梅棹忠夫がその生涯において深く愛好したものであった。中学生時代から登山に没頭し、その生涯をかけて広く海外を跋涉した梅棹忠夫の探究心は、生涯衰えず、また著作活動においても膨大な作品を発表した。後進の指導という面でもその意欲は生涯やむことがなかった。

日本最初の探検部である京大探検部の創立に際し、梅棹忠夫が果たした役割なども、梅棹忠夫の旺盛な活動の一つとして長く語り継がれている(『京大探検部』新樹社、2008年)。

登山・探検活動を愛し、その報告書作成を何よりも重視した梅棹

忠夫の生涯をみると、梅棹忠夫の名前を冠するこの「山と探検文学賞」は誠に当を得たものである。ご本人もこの賞には大変お喜びで

「本賞の創設がきっかけとなって、登山や探検活動がさかんになり、おおくの人びとの心に未知への探求の火がもえさかることをねがっております」と述べている(授賞式で配布された小冊子より)。

第1回受賞作品は『空白の五マイル チベットの、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』(集英社、2010年)が選ばれた。選考委員会の説明によれば、「おおむね5年以内に出版された91冊」から本作品が選ばれた。著者、角幡唯介は1976年生まれ、早稲田大学探検部に所属。授賞式は梅棹忠夫にとって「ながくてふかい縁」のある長野で開催された。長野県知事、大町市長なども出席され、この賞にたいする長野県の熱い思いも感じられた。

広大なチベット高原の南側は、屏風のように立ちはだかるヒマラ

ヤ山脈により塞がれており、高原からインド洋への排水は限られた河川に依存する。高原東部では、ツアンポー川により大きく屈曲したツアンポー峡谷を経由して排水されている。世界最大とも表現されるこの峡谷は探検史においても常に注目された地域であった。狭い切れ目を急流がものすごい勢いで流れるこの峡谷は、巨大な岩壁が立ちはだかり、探検者を寄せつけなかったのである。その最も未探検の部分は「ファイブ・マイルズ・ギャップ(空白の五マイル)」と呼ばれた(受賞作55ページ)。

受賞作は、ツアンポー渓谷、そのなかでもこの五マイルに単身で挑んだ探検の記録である。著者は学生時代からこの地域への関心を抱き、2002年から2009年の期間に行なった2回の単身行動でこの五マイルを究めることに成功した。行動記録のみならず、過去の探検史などをおりまぜながら記述した簡潔な著者の文章は、危険な、あるいは困難な行動を的確に描写しており、読者は背筋の寒くなるような緊張感を味わうことができる。

未知で困難な地域への探検を

個人で行なうのは無謀な行為のようでもあるが、この探検が単身であったからこそ可能となったことを、本書は教えてくれる。単身であることはリスクが高い、と一般的には信じられている。しかし著書から、フレキシブルなプラン、迅速な判断など単身で行動することの利点を知るのである。中国人警官の心温まる親切な態度なども含め、無許可での探検などは、単身であったからこそ可能であった。かつてチベットに潜行した先駆者も単身であったことを思い起こさせる。

よけいなことかもしれないが、最後にひと言付け加えたい。探検のルートを示す地図についてである。おそらくGoogle Earth地図に基づき作成されたであろうが、地図には典拠が示されておらず、縮尺も表示されていない。2009年冬の単独行の地図では、中心部がノドに綴じ込まれており、この部分は見ることが出来ない。読者にとって地図は未知の地域を案内してくれる重要な機能だ。たんなる付属物のように扱うことは、避けたい。

イベント

松本で「山岳フォーラム2011」 「山の日」制定を強くアピール

西村政晃

11月20日午後、松本駅近くのホテルブエナビスタで《岳都・松本「山岳フォーラム2011」》が開催され、「山の日」制定が強くアピールされた。

11団体で実行委員会

松本市が中心となり、10月中旬、「山の日」制定協議会（日本山岳協会、日本山岳会他の5団体）、日本山岳会信濃支部、信濃毎日新聞など11団体で実行委員会が結成された。



「山の日制定」に向けての提案がなされた

この企画には当会の成川隆顕評議員（「山の日」制定協議会代表幹事）と萩原浩司理事（『山と溪谷』元編集長）が協力。2人は当日の運営でも大事な役割を果たした。

「山の大切さ魅力を岳都から発信」

山岳フォーラムは当初700名の参加者を予定していたが、新聞での募集が人気をよんで1000人が参加。午後1時から始まった。

最初に菅谷昭市長が登壇、「日本は国土の70%を山林が占める山の国です。松本市は槍・穂高連峰、美ヶ原高原など、雄大な山々を有する岳都です。このフォーラムを通じて山の民として岳都・松本から山の大切さ、魅力、そして山岳環境課題などをともに考え、次世代へと伝え繋げていくスタートとしたいと思います」と、熱のこもったあいさつを行なった。

第1部 山の女性ファッション史

山ガールのファッションが話



地元の大学生18人がモデルとして登場した

題になる昨今、萩原さんが「女性ファッションに見る登山史100年」というユニークなテーマに取り組み、史料を丹念に調べてまとめた。古くは村井米子さんのファッションから山ガールまで、登山服の変遷をスライドを使って紹介して参加者を楽しませた。

後半はメーカー5社の提供で最新の登山ファッションが披露された。男女の大学生モデルが次々と登場、萩原さんとゲストのエッセイスト華恵さんとの軽妙なかけあいが会場を沸かせた。

第2部 「山の日」シンポジウム

まず田部井淳子当会会長が「人生は8合目からおもしろい――

山登りと健康」と題して基調講演を行なった。山の魅力、東北地方の支援、加えてご自分のエベレストの女性初登頂の模様など、映像をまじえて、聴衆に笑いの絶えない講演となった。

続いてパネル・ディスカッション《岳都・松本から「山を考える」に移った。司会は信州大学山岳科学総合研究所の鈴木啓助所長、パネラーは坪田明男松本市副市長、田部井さん、成川さん、登山体験を作品にとり入れている漫画家の鈴木とも子さん、北ア山小屋友交会の山口孝さん。

鈴木ともさんは「登山の情報、何々はダメというものが多いけれど、こうしたら安全に登れた、という伝え方にすれば若者にもっと広がる」と指摘した。

成川さんは、参加者に配られた「山を考える・山の日をつくろう」（『山の日』制定協議会発行）のパンフレットをじっくり読んでほしいと呼びかけ、「山の日制定が山への関心を広げる契機になる」と強調した。松本市に総合的な山岳スポーツ文化センターをつくらう、などの提案には会場から賛意を示す大きな拍手が起こった。

トピックス

「小島烏水レリーフ」が見つかりました！

砂田定夫

「見つかった小島烏水レリーフ」
(羽田栄治会員撮影)

『山』7月(796)号に、おたずねの記事を寄稿しましたが、行方分からなかった「小島烏水レリーフ」が思いがけず早く見つかりました。この朗報は10月1日、

柴山信夫会員(山研委員長)からメールで届けられました。山研管理人の内野さんが大掃除のとき物置の中にあるのを見つけたとき、うで、会報を読んで当該品ではないか、と気づかれたとのこと。その後、柴山会員にご足労いただき、資料映像委員会の羽田栄治会員(評議員)との間で調整していただき、10月28日、事務局に搬入という運びとなりました。

レリーフは横38センチ×縦52センチ×厚さ1・8センチの銅製で、一部に錆が発生していました。以後の管理は資料映像委員会に委ねられるこ

とになりました。以前、山研の展示室に飾られた当該レリーフを見た記憶があるという会員もおりますが、いつ物置に収納されたかは不明です。

レリーフの事情が『山岳』第93年(通巻151号・1998年)

に記載されていることを石橋正美資料映像委員長からご教示いただきました。執筆者は山田二郎元会長(名誉会員)で、「佐藤久一郎―山岳会への偉大な貢献 名クライマー、芸術家、友情厚き小柄な巨人の生涯」という伝記文です。

佐藤久一郎氏(名誉会員)は上高地・梓川右岸にあるウェストンのレリーフ、金山平の木暮理太郎レリーフ、六甲山麓と穂高滝谷の藤木九三レリーフとともに、今回の烏水レリーフなどいくつも製作しておられます。この文中で「九五〇年(昭和二十五年)六月十日に山岳会図書室(お茶ノ水)南面の外壁に飾られた(会報一五一号)」。現在も山岳会が所蔵している」と記述されています。引用されたの

は『会報』151号(1950年9月)に載った「故烏水翁紀年像落成」という記事で、執筆した「T・F」とは藤島敏男氏(名誉会員)と思われます。レリーフ製作の経緯が記述されており、かなり鮮明な写真も掲載されています。文の前半部を引用します。

「烏水翁没後、小島家から本会に寄贈された資金で、なにか永くあとまで残るものを作りたいと考えた挙句、故人が最後まで深い関心を寄せていられた図書室に、故人の記念像をということに相談がまとまり、かつてウェストン像を手がけた会員佐藤久一郎氏に、その制作を依頼したのは今年の一月であった。

文芸に美術に登山に夫々一家をなした故翁の奥深く幅広い性格を一面の浮彫像に具現したいというので、制作者の苦心は一通りのものではなかったが、約半年にして見事に出来上り、去る六月十日図書室南面の外壁に掲げられる運びとなった。(以下略)」「現代仮名遣い、常用漢字に直してあります」

レリーフがお茶の水時代の図書室の外壁に掲げられた年は、烏

水没後一年半を経過した時期でした。眼鏡をかけていない烏水の表情というのも稀少ですが、いずれにしても製作者苦心の作で貴重なものであり、かつて図書室の壁に掲げられていたレリーフが再び相應しい場所に設置され、多くの会員の目に触れ、その功績を偲ぶ縁になればと願っております。

初代会長・小島烏水(久太)翁が本会の創立と発展、初期登山界に残した功績、山岳文化に果たした影響については『山』796号にも書いたように、いまさら述べる必要はないと思います。同時代に活躍した木暮理太郎、岡野金次郎、高頭仁兵衛の各翁は屋外で立派に顕彰されています。烏水翁のレリーフも屋内に飾られるだけにとどまらず、会員外の山の愛好者の目にも触れる場所に設置し、更に進めて碑前祭のようなイベントが行なわれて当然ではないかと考えております。

先達を敬う心、その功績を偲ぶ気持ちには失いたくないと常日頃感じているところであり、日本山岳会としてご検討いただきたいと思います。

東 西 南 北

イタリア国立山岳博物館 訪問記

小林岳彦

9月にトリノで開かれた学会に出張した機会に、アブルッツィ公記念国立山岳博物館 (Museo Nazionale della Montagna Duca degli Abruzzi) を訪問した。市街中心部の東を流れるポー川に架かる橋を渡り、丘 Monte dei Cappucciniに10分ほどで登ると、トリノの全貌が見渡せる。ここにイタリア山岳会(CAI)トリノ支部が展望台を1874年に作り、後に当館に発展したとのことである。視程がよければ雪を頂いたアルプスが望みできるはずだが、生憎と近郊の山しか見えない。欧州から地中海に注ぐ川は南行していると暗黙裡に考えていたので、ポー川がここでは北行しているのに

驚く。

入場料は6ユーロ。入口近くにマッターホーンの大きな油彩画が掛かっている。1階には、絵画、写真、地図、山岳民俗、交通、ツリーズム、宗教、CAIの歴史などが展示されている。博物館のウェブページを閲覧できる端末もある。1階の展示物には、すべてイタリア語の説明に英文が併記されている。2階には、登山用具やスキー、1954年イタリアK2隊のウィンパー型テント、R・メスナーが8000メートル峰14座登頂に使った軽量ドーム型テント、アブルッツィ公の北極探検隊(1889-90年)の遺留品(1994年に発見)、ヒマラヤや西域探検などの展示がある。1900年前後に撮影されたヒマラヤ、コーカサス、アラスカなどのモノクロ写真が美しい。館内数カ所で見られている25分間ほどのビデオ(英語字幕つき)

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)



イタリア山岳会にある展望台で

では、アルプス登山、スキーやCAIの歴史、登山服装の最近の变化、登山思想などを扱っている。欧州では1956年のコルチナ五輪によってスキーの大衆化がもたらされたとの指摘があった。地下階の臨時展示には、英文の説明がないが、ワイン樽(販売用?)の鏡に貼られていたカラフルなラベルで、山岳が遠景に描かれたものを見られる。さらに、山岳兵、山岳戦や鉄道・トンネル建設の記録などの展示がある。

アメリカ山岳会の図書館・博物館(コロラド州ゴールデン)やドイツ山岳会博物館(ミュンヘン)などと比べると、それぞれに特色がある。当館は、登山技術、高所医学、山岳文学、遭難、動植物などにはほとんど触れていない。同時に入館していたのは10名に満たなかった。博物館の編んださまざまなテーマのモノグラフが販売されていたが、イタリア語を解さないで購入しなかったのは残念だった。それ以外には、博物館グッズはほとんどない。同館とCAIが共同管理する図書室(国立)は訪れることができなかった。

なお、同館のHPは、以下のとおり。

<http://www.museomontagna.org>

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

紅葉の「信越トレイル」トレッキング

10月14～16日に、集会委員会
が企画したトレッキングに申し込
み、山梨から参加した。

14日、早朝に高根の家を出て、
車で戸狩温泉に向かった。天気は
下り坂であったが、紅葉の「信
越トレイル」への期待は大きいも
のであった。集合時間には早かつ
たので、平丸峠まで登り、古池や
桂池などの紅葉を楽しみ宿に行っ
た。

列車や車で参加した10名と合
流、今回は総勢14名であった。部
屋割りを済ませ荷物を置き、宿の
マイクロバスで関田峠に行き、今
回の「信越トレイル」のトレッキ
ングが始まった。

峠からは良く整備された登山
道となり、稜線伝いに黒倉山、そ

して鍋倉山までブナ林の続く快適
な縦走であった。鍋倉山から少し
戻り黒倉山との鞍部から、南東側
の谷に下り、ブナの原生林に向
かった。そこには「森太郎」とい
うブナの巨木がありそれは、樹高
25m、目通り5・35m、推定樹齢
400年で、林野庁の「日本の
巨木100選」に選定されてい
る。途中で森林インストラクター
の水島さんと合流。彼の名調子の
ガイドでだいぶ時間をオーバー
し、下山口に16時40分に着いた。
そこにはすでにマイクロバスが
待っていた。

15日、雨の弱まるのを待って、
関田峠に向かった。峠から雨具を
着て9時25分から長い縦走路が始
まった。登山道は梨平峠、牧峠、
宇津ノ俣峠、そして伏野峠へと尾
根上の、峠をつなげ続いていた。

尾根上には冬の大量の積雪で
湾曲したブナがたくさんあり、ブ

ナの粘り強さを感じさせられた。
また縦走路には小さな登り下りが
あり、昨日から雨で滑りやすく
なっていた所がたくさんあり、歩
き難くて疲れた。野ノ海峠までの
予定を短縮し、伏野峠に16時のマ
イクロバスの迎えにホッとしたの
は私だけだったろうか。

16日、またも雨で予定を短縮、
歩き始めが深坂峠からで、三方岳
そして天水山へと登り、あとは
見事なブナ林を下り三叉路の天
水山登山口へと下りた。ここから
またマイクロバスに乗り宿に帰っ
た。

今回のトレッキングは雨にた
たられたが、見事なブナ林の紅葉、



鍋倉山頂 (1288m) にて

温かい温泉、そして新潟から参加
した吉田さんからの越後の美酒
旅館の美味しい料理、そして参加の
皆様の楽しい会話、集会委員の努
力に感謝し、今回歩き残したトレ
イルをつなぐ機会が近くあること
を念願してる。皆さまありがとうございました。

(井口 功)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

千葉支部

小笠原諸島自然観察会

支部設立5周年行事

世界自然遺産登録を見越して
1年余り前から計画していた小笠
原諸島自然観察会を11月1～6日
に行なった。7月に予定していた
が台風で船が欠航し、ようやく11
月に出かけることができた。東京
多摩支部、首都圏からの人々たちも
含め参加者は17名。講師として、
自然学総合研究所長の西條好勉先
生に参加いただいた。

小笠原諸島は、東京から南に約
1000^{キロ}、緯度は沖縄とほぼ同
じ、北から伊豆列島、父島列島、
母島列島、硫黄列島、そして最南
端の沖ノ島島など30余りの島々か
らなる海洋島で、東京都小笠原村
にある。大陸と一度も陸続きにな
ったことがないため多くの固有
種が見られ、植物で36^種、昆虫類

で28^種、陸産貝類では94^種にもな
る。小笠原には空港がなく、交通
手段は、東京・竹芝桟橋と父島・
二見港を結ぶ旅客船「おがさわら
丸」だけで、おおむね6～8日間
に1度の就航である。

11月1日10時、竹芝桟橋出港。
2日11時30分、父島入港、所要
時間25時間30分。まず、小笠原
ビジターセンターの展示を見学、
資料をもらって裏手の三日月山
(204^{メートル})に向かう。テリハハ
マボウなど固有種や戦跡を見なが
らガジユマルーチを通って展望
台へ。母島、南島などが遠望でき
る。クジラのウォッチングポイン
トでもある。

3日、現地ガイドの案内で父島
東南部の躑躅山(302^{メートル})へ。小
笠原では、森林生態系保護地域の
うち重要な地域への入山は林野庁
の講習を受けたフィールドガイド
の同行を必要とする。固有種で絶

滅危惧Ⅰ類(CR)であるムニンツ
ツジが1本だけ山頂に自生してい
る。ただし山頂には行けない。奇
岩を眺めて亜熱帯農業センタ
ーへ。展示温室、果樹温室、ヤシ園
があり、小笠原の植物を学ぶのに
役立つ。オガサワラノスリが空を
ひと回りして見送ってくれた。

4日、母島へ。父島発7時30分、
母島着9時40分。乳房山(462^{メートル})
に向かう。帰便は母島発14時、
4時間20分しか滞在できないので
慌ただしいピストン登山。固有種
メグロを見られたのが収穫。夜は、
小笠原森林生態系保全センター
管理指導官の藤田富二さんにペン
ションに来ていただき、自然保護



父島・小笠原亜熱帯農業センターにて

の現状、そして自然遺産登録後の
展望について貴重な話を聞くこと
ができた。

自然遺産登録により懸念され
るオーバーユース対策としては、
自然公園法に基づく利用調整地区
制度の導入が有効と私は考える。

5日、父島南東沖の無人島、南
島へ船で向かったが、波が高く上
陸できず沈水カルスト地形を海上
から観察する。イルカ5頭が歓迎
してくれた。父島14時出港。6日
15時30分、竹芝桟橋着。乗船時間
往復51時間、現地滞在延べ3日間
という慌ただしい日程であった
が、タイムリーな企画で収穫の多
い楽しい観察会であった。

(篠崎 仁)

福井支部

創立20周年記念事業——
森づくりについて

平成20年10月26日、第1回森
作り活動を13名の参加を得て、越
前町糸生地区の「泰澄の杜」近
くの町有地を貸与していただい
て実施しました。その後、毎年、
植樹と下刈りなどの管理、既存
林の整備など、時間と労力をか



支部創立20周年事業として里山を整備した

けて続けてきました。そして今年も10月30日雨天のなか、会員参加のもと支部創立20周年記念式典の事業として行ないました。人間が生きてするために祖先が持続可能な形で共生してきた「里山」は、人間により伐採され管理された二次的な自然環境となりました。この土地には池があり、ビオトープの整備と、周辺の散策路を整備しました。隣地の糸生中学校の廃校が生涯学習や青少年の学舎となっています。そこで自然体験の一環として、支部創立20周年の事業にとり入れ、散策路の整備と、不要なマツおよびタケの伐採と除去を行ない、

さらに下刈りとクリの木を植樹しました。

春のタケノコ狩りや、秋のキノコ採り、クリ拾いなどを楽しみながら、息ながく続けていければと願っています。

(宮本数男)

東海・関西・京都支部共催 第15回森の勉強会

平成11年以来3支部共催の下に「森の勉強会」を開催している。今回は東海支部が担当で、テーマを「森林認証(FSC)制度

の基に、環境的機能が高く持続可能な豊かで美しい高品質の森林の育成と、整備や機械化推進等による高能率・高付加価値の環境管理型林業経営について学ぶ」とし、10月22日～23日に開催した。

1日目、首都圏(高尾の森づくりの会)3名、東海支部15名、関西支部3名、京都支部3名、新潟県魚沼市役所2名、合計26名の参加者が集合した。

13時から速水林業大田賀山林の研修室で、速水亨代表から「人々のため、生き物のため、地

球のため、未来のために森を育てる」とのタイトルのもとに、パワーポイントによる講義が16時まで行なわれた。講義は、地球上の森林の変遷、日本の森林・林業の現状、速水林業の育林技術などであった。広範な内容について知見と深い学識を基に、実践的林業経営を踏まえた分かりやすい説明は参加者一同を魅了し、あつと言う間の3時間だった。続いて質疑応答に入ったが、質問者が続出し時間切れとなったことは残念だった。

休憩後、16時から同会場で、(公・財)森林文化協会、海老沢秀夫氏(月刊グリーン・パワー編集長)の中国における「退耕還林」(農地を林地に戻すこと)の現状について、パワーポイントを使つての講演が17時まで行なわれた。講義は、中国での流失、植栽樹種などで、スライドに映し出された植林地の映像は、かつてのわが国でも展開された禿山復旧工事を想わせる風景であった。が、その大規模さに改めて中国の広さと人パワーの凄さに感服した。

2日目、8時30分、再び速水

林業大田賀山林に集結し、代表の案内で11時まで現地見学。

「大田賀山林」は速水林業経営の1070畝の一部で、93畝の団地である。ほとんどがスギ・ヒノキの人工林で、若い再造林地から樹齢180年生余にも及ぶ林分がモザイク状に分布していて、速水林業の展示林的な山林と言えるようだ。間伐が行き届いた林内は明るく、その林床はどこも中低木の灌木かシダに覆われ、林縁からは表土はもとより落葉落枝すらも見られない。林相の境界や溪流沿いには大きな広葉樹が残されており、その溪流は昨日の大雨で増水してい



ヒノキ研修室前にて

るが濁りはない。

林内に張り巡らされた林道・作業道を歩きながら、よく管理された見事な現実の林分を前にしての解説は、前日の座学の内容を実証するもので、配付資料に引用されている「最も美しい森林は、また最も収穫多き森林である」(アルフレート・メーラ)「恒続林思想」の意味が分かったような気がした。次いで、土場(木材集積場)に移動し生産材を見せていただいたが、直径40センチ余の木口の年輪幅が、最初から最後までほとんど均一であることから、如何にきめ細かな管理が長年にわたりなされているかが理解出来た。最後に、セラミックス利用のポット苗畑を見学し、省力経営にも尽力されている一端をうかがい知ることができた。

午後からは、道の駅「海山」を起点に尾鷲神社まで、語り部・川端守氏(JACC会員)の案内で熊野古道(馬越峠コース)を体験し、有意義な「第15回森の勉強会」を無事終了することができた。極めて多忙のなか、2日間にわたり講義・案内を受けた速水亨代表並びに海老沢秀夫

氏に深く感謝いたします。

(東海支部 川合鋁二)

東九州支部 韓国山岳会慶南支部との 交流登山

「突然ですが、久住山に登るのと一緒に登りませんか?」という内容の手紙が、韓国山岳会慶南支部の催支部長から加藤支部長宛に届いたのが10月中旬。催支部長は今年5月、我が東九州支部が交流している韓国山岳会蔚山支部との交流登山で智異山に登った際、地元の支部長としてガイドをしてくれた人である。2日間おつきあいしてくれたが、その巨体とは正反対に実に細やかに、あれこれとお世話をしてくれた。

韓国山岳会蔚山支部が、日本山岳会の秋田支部と交流しているということはその時に聞いていた。そして今年は秋田を訪れる予定であることも聞いていた。しかし、震災等の関係で東北地方の訪問を断念し、その代わりとして急遽九州の山を選んだとのことであった。今回は福岡の

宝満山に登り、熊本と阿蘇を観光した後、10月29日に久住山へ登る計画とのことである。

急なことでもあり、支部員の中でにわかな呼びかけに対応できる者は少なかったが、29日、3名の支部員が登山口の牧ノ戸峠に待ち合わせた。バスで着いた韓国のメンバーは12名で、催支部長以外は初対面である。登山口で互いに自己紹介などを行ない、しばしの交歓のひととき。記念写真を撮り、9時半過ぎにスタートした。

当日はあいにく朝から雨もようで、登るにつれて雨足は本格的となり、雨の中の行軍となつ

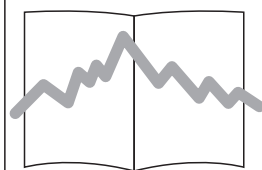


晩秋の雨のなか、韓国山岳会のメンバーと

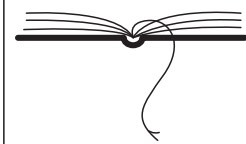
た。しかし、韓国の岳人はみな元気で、しかも、年齢的には日本山岳会の平均年齢と比較するととても若い。晩秋の雨の中、韓国のメンバーほとんどは、上はパーカー、下は雨具なしである。山頂は雨に加えて風もあり、視界もきかない。写真を撮って早々の下山とした。途中の久住別の避難小屋で昼食を予定していたが、「寒い」という声が多くなり、急いで下山することとした。下りは諏峨守越を通って、一気に長者原へと急ぐ。

14時半、下りついたところにある大きな東屋の下でやっと弁当を開く。食事をとりながらのしばしの歓談。そのあと貸し切りバスに乗り込む一行と、1日の友好を喜び合い、別れを惜しんだ。言葉はほとんど通じないが、同じ岳人同士、気持ちは通じ合うものだ。

(飯田勝之)

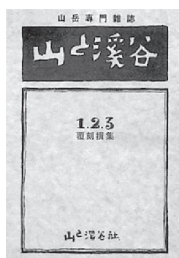


図書紹介



山と溪谷社・編
布川欣一・解説

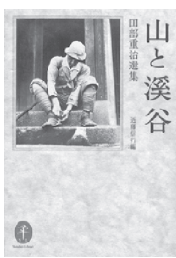
『山と溪谷 1、2、3 覆刻編集』



2011年11月
山と溪谷社刊
文庫判 384頁
定価 987円

『山と溪谷 田部重治選集』

田部重治・著
近藤信行・編



2011年11月
山と溪谷社刊
文庫判 384頁
定価 987円

それが本邦初の山岳雑誌『山と溪谷』の創刊だ。

初版は1000部とも5000部ともいわれるが、4日で売り切れたという。それが81年後の今日にいたっている。

今回、ヤマケイ文庫から刊行された『山と溪谷 1、2、3 覆刻編集』は、その1号から3号の一部を選んで復刻したもの。正直なところ、旧仮名づかいの本文の文章は読むのに苦労するが、目次や広告をパラパラと目にしているだけでも楽しい。目次には冠松次郎、松方三郎、黒田初子らも名を連ね、『大衆登山と日本山岳會批判』などという、なんとも中身が気になる特集もある。広告にはリュックサックの片桐などと並んで、三越や松屋などのデパートの広告まで。どんなつてを使ったのか、こっちも気になるところだ。創刊にいたる背景や、関係者、出版事情につ

いては布川欣一氏の解説に丁寧に述べられており、川崎青年の奮闘ぶりに寄せる温かい気持ちも伝わってくる。

さて、川崎は雑誌を創刊するにあたって、ひとりの岳人のもとを訪ねている。『日本アルプスと秩父巡礼』に続く新刊を出したばかりの田部重治、47歳。田部の著書を愛読していた川崎は、その場で新刊の書名を新雑誌に使わせてほしいと頼む。その書名が『山と溪谷』だった。そう、雑誌『山と溪谷』のタイトルは、川崎が心酔する田部重治の本からもらったものだったのだ。

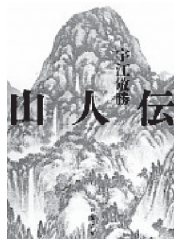
さて、ヤマケイ文庫のもう1冊の『山と溪谷 田部重治選集』は、この田部重治の『山と溪谷』の文庫化である。当時の川崎青年が心酔し、時代を経て今にいたるまで読者を魅了し続けている、田部重治の山に向かう気持ちの持ちようとその文学性については、こちらにも編者の近藤信行氏の解説が光る。田部の人となりが立ちあがるようだ。同じく近藤信行編の岩波文庫版の『新編 山と溪谷』（1993年刊）と読み比べてみてもおもしろい。

ヤマケイ文庫の2冊ともに言えることだが、文庫本、それも特に復刻や選集の場合は解説が命だ。それにしても、雑誌『山と溪谷』と書籍『山と溪谷』の2冊を文庫化して同時刊行とは、心憎い版元の演出である。あのなんとも古めかしい『山と溪谷』のロゴを書店で目にしたら、ぜひ80年前の2冊の『山と溪谷』と、2人の岳人に思いをはせてほしい。

(三好まき子)

宇江敏勝・著

『山人伝』



2011年6月
新宿書房刊
四六判 181頁
定価 2100円

「おもしろうて やがてかなしき (鵜舟かな)」。この本を読んでもまず頭に浮かんだのは先人のこの一句であった。舞台は吉野熊野・十津川奥地の紀伊山地。かつて、この山地で生業を立てていた樵、炭焼き、木地師、鋤山師、筏流し、獺師、流れ者など、山に暮らす人々の暮らしのありようとその死にざまを、それぞれ物語風に仕立てた

掌編15編からなる短編集である。帯には「民俗伝奇小説集」と書かれてはいるが、著者が生まれ育ち今も生活しているこの土地で実際にあったことや伝聞を書き記したものであるのか、小説というよりも民俗の語り部集に相応しいと思われる。著者には、この地で林業をしながら暮らして考えた山人の記録と思索が『宇江敏勝の本』全12冊に集大成されているが、この短編集はそれを物語世界に昇華させたものである。

吉野熊野は世界遺産にも指定され、大峯山奥駆けや熊野古道巡りなど最近では登山者にも人気が高い。しかし、往還を少し離ればそこは太古から変わらない山深い地であり、そこに生活する人々にとっては本書に書かれているような、偶々訪れた物見遊山客では窺い知れない忘れ去られた山の生活と信仰があったのであろう。

終章の「鈴の音」は、そのような山人や林産物の商人で賑わっていた熊野川河口の旅籠屋の孤児の女中と、毛皮を売るために時々そこに泊まっていた殺生猟師との悲恋物語である。この女中はこの猟師と所帯が持てる日を夢見ていた

のであるが、猟師はいつも「わしはかはいらんのや」と言つて山に帰って行くばかりであった。ある日女は男を探して山中深く分け登って行った。雪が降りしきる寒い夜のことであった。山中のヌタ場の倒木の陰で獣を待っていた猟師はリンリンという鈴の音を聞いた。その時大きな狼の影が動いた。そこには白い巡礼姿の女が息絶えていた。リンリンと聞こえたのは狼がくわえて引きずったはずみで鳴った女の鈴であった。男は雪の上に座り込んで未だかすかなぬくもりが残っている女を抱き続けた。

冒頭で書いた「おもしろうて」とは何十年前か前までは存在していた日本民俗の暮らしと心がすでに忘却の彼方に消え去つて伝奇となつてしまっていること、「かなしき」とは人間の業の深さである。

(大塚忠彦)



佐藤勉・著
『懐かしき南会津 楽しき山里』



2011年10月 歴史春秋出版刊
A5判 95頁
定価 1575円

昭和30年代より、当時なお未開の山域であった南会津の沢と尾根を踏査した著者が、その山里で出会った風景と人の生活について多くの写真で紹介した山行記録。

千葉県の市川学園山岳OB会を率い、その仲間と地域研究として南会津に数多く訪れるなかで、その山里の生活と素材で親切な人々との触れ合いに魅かれてゆく。また現在ではほとんど見かけなくなった瓦葺屋根と古民家も当時は山里の生活をしつかりと支えており、著者が撮影した写真にも数多く残されている。そして沢や尾根への関心に加え民俗学の見地からも南会津への関心は更に深まり、その想いはこの地に会の山小屋を建設するまで発展してゆくことになった。

先に山行記録をまとめた『我が南会津』(昭和60年刊)、『帝釈山

脈の沢』(平成13年刊)同様、緻密な記録に基づいた文章からは、歴史、地形、集落の様子、山里での会話、宿泊した家の構造などがよくわかり、読者も当時の南会津を共に旅している気持ちになつてしまう。また大判で載せられた写真からは、錦岩川に架かる雪に覆われた木橋、運搬の馬を引く人、中門造りの瓦葺農家など興味深い当時の様子を直接見ることができ興味深い。

著者は今日に至るまで精力的に南会津を訪れその自然と人々に触れているが、その目には高度成長期を経て瓦葺屋根の消滅とともに変化する南会津があるという。そこに本書を纏め上げた熱い想いがある。

40〜50年前の日本の山とその里の風景を現在と比べるなかで、とても遠くに感じてしまうのはそれだけ大きく変わったからだろうか。現代の生活を送るなかで無意識に求める心の拠り処を大いに刺激し、ほんのりと暖めてくれる、だれもが読後にやさしくなれる1冊だと実感した。

(大槻利行)

No.	書名	著者	発行	備考	価格
105	登高者	大島亮吉 / 著 安川茂雄 / 編	三笠書房	S 40 函	700
134	放浪のあしあと	加藤泰安	創文社	S46 函	600
139	浅間・ハッテ岳——田淵行男写真集	田淵行男	朝日新聞社	S49 カバー 函	1500
140	黄色いテント	田淵行男	実業之日本社	1985 函	1500
142	エヴェレストの東	サー・エドモンド・ヒラリー / 著 藤木九三 / 訳	ベースボール・マガジン社	S31 カバー *訳者署名あり	800
149	山岳謁迎	中村清太郎	山と溪谷社	S19	1500
151	遠き近き	松方三郎	龍星閣	S26 函	1500
152	堇色の時間	串田孫一	創文社	S35 函 帯	700
157	きのうの山きょうの山	上田哲農	中央公論社	S55 函 帯	600
162	『日本百名山』の深田久弥と山の文学展		世田谷文学館	H7	1000
167	雲の上の道	深田久弥	新潮社	S34 カバー	600
177	日本アルプス山人伝	安川茂雄	あかね書房	1971 函	800
182	上高地	深田久弥・長尾宏也 / 編	修道社	S36 函	800
183	近代日本登山史	安川茂雄	あかね書房	S45 2刷 カバー 函	1500
184	登山史の発掘	山崎安治	茗溪堂	1979 函	1000
185	画文集 山の声	辻 まこと	東京新聞出版局	S46 カバー	2000
188	未踏の山河——シブトン自叙伝	大賀二郎・倉知 敬	茗溪堂	S47 カバー 函	600
189	屏風岩登攀記	石岡繁雄	碩学書房	S52 カバー 函 *限定版 署名あり	800
192	北の山 続編	伊藤秀五郎	茗溪堂	1976 函	800
193	山は満員	渡辺公平	茗溪堂	1975 カバー *著者献呈署名あり	800
194	いろいろばた	南会津山の会	茗溪堂	1972 函	800
196	チベットの七年	ハインリヒ・ハラー / 著 福田宏年 / 訳	白水社	1981 函 帯	600
197	天国・地獄・ヒマラヤ	H. レッヒエンベルク / 著 福田宏年 / 訳	明文堂	S34 函	800
199	挑戦者——'65 アルプス登攀の記録	第Ⅱ次 RCC / 編	あかね書房	1965 2刷 帯 函	800
216	ヒマラヤへの道——京都大学学芸部山岳部の五十年	今西錦司 / 編	中央公論社	S 63 カバー 帯	800
233	孤高の道しるべ——徳高を初縦走した男と日本アルプス測量登山	上条 武	銀河書房	S58 函	1000
267	岳人事典	岳人編集部	東京新聞出版局	S58 函	800
306	明治の山旅	武田久吉	創文社	S46 函 ※著者署名あり	1500
311	Neige et Roc ——雪と岩	ガストン・レビュファ / 著 近藤等 / 訳	新潮社	S 39 3刷 ビニールカバー	800
312	Entre Terre et Ciel——天と地の間に	ガストン・レビュファ / 著 近藤等 / 訳	新潮社	S 38 ビニールカバー	800
313	glace, neige et roc 氷・雪・岩	ガストン・レビュファ / 著 近藤等 / 訳	新潮社	S 47 帯	1000
322	遊歩百山 1～12	森林書房 / 編	山と溪谷社	1992～1995	各巻300 全巻一括購入の場合は3000
395	ヒマラヤ地図——タクラマカン砂漠を中心とした			1919 *少々虫食いあり	2000
Y 1	The Mountain World 60/61	Barnes, Malcolm (ed.)	George Allen & Unwin	1961 カバー	500
Y2	The Mountain World 62/63	Barnes, Malcolm (ed.)	George Allen & Unwin	1964 カバー	500
Y3	Another Ascent of the World's Highest Peak —— Qomolangma	Norbu, Sodnam et al. (Photo)	Foreign Languages Press	1975 カバー	500
Y4	Field Guide to the Birds of the Eastern Himalayas	Ali, Salim	Oxford Univ. Press	1977 カバー	500
Y5	Spy on the Roof of the World	Wignall, Sydney	Canongate	1996 カバー	500
Y6	After Everest —— An Autobiography	Tenzin Norgay Sherpa	George Allen & Unwin	1977 カバー	500
Y7	Kongur —— China's Elusive Summit	Bonington, Chris	Hodder & Stoughton	1982 カバー	500
Y8	Der Himalaja Bluht	Harrer, Heinrich	Pinguin-Verlag	1980 カバー	500
Y9	Everest —— The Unclimbed Ridge	Bonington, Chris	Hodder & Stoughton	1983 カバー	500
Y12	Footsteps in the Clouds —— Kanchenjunga a Century Later	Morrow, Baiba & Pat	Raincoast Books	1999	500
Y13	Wo der Wind Betet	Boon, Jan	Steiger Verlag	1992	500

●頒布価格が500円以下の和書を省略しています。全目録(約400冊)はホームページ(図書委員会)から検索できます。
また、必要な方にはお送りしますので、お申し出ください。

●目録の申込み、問合せは三好まき子まで TEL (090-8019-8601) ✉ 344mm@mbe.nifty.com

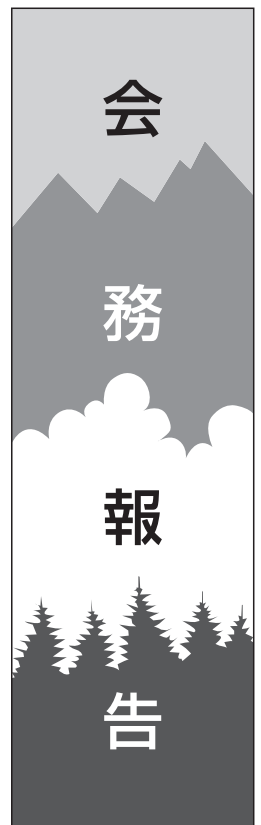
図書交換会出品目録および購入申込みの案内

「図書交換会」を、2月18日(土)に開催します。多くの会員の参加をお待ちします。

交換会当日の詳細は19ページの「インフォメーション」に掲載していますが、当日に来場できない方は、下記の要領で購入の申込みを行なってください。

- 郵便(日本山岳会・図書委員会あて)またはメール(344mm@mbe.nifty.com)で、1月末日までにお申込みください。
- 購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。入札本(★印1～5)の場合も、入札価格を明記のうえ、同じ要領でお申込みください。
- 複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ないます。来場できない方の抽選は、図書委員が代行します。
- 購入図書の送料は購入者負担とし、交換会終了後に代金と一緒に請求させていただきます。

No	書名	著者	発行	備考	価格
★1	北ア展望——田淵行男作品集	田淵行男	朝日新聞社	S 41	最低価格 2000 円より入札
★2	ヒマラヤ——白川義員作品集	白川義員	小学館	S 46 カバー 箱	最低価格 5000 円より入札
★3	蒼い星——安川茂雄追悼文集		長越蓉子	S53 函	最低価格 4000 円より
★4	アルペン行	鹿子木員信	政教社	T3 * 著者写真つき	最低価格 3000 円より入札
★5	日本アルプス登山案内	矢澤米三郎・河野齡蔵	岩波書店	T9 7 版	最低価格 1500 円より入札
15	極東の遊歩場	ウォルター・ウェストン/著 岡村誠一/訳	山と溪谷社	S 45 箱	800
16	山は満員	渡辺公平	茗溪堂	1975 カバー ※著者署名・絵あり	800
17	復刻 尾瀬と鬼怒沼	武田久吉	大修館書店	S 50 箱	800
18	復刻 山の絵本	尾崎喜八	大修館書店	S 53 カバー	800
19	復刻 氷河と万年雪の山	小島烏水	大修館書店	S 50 箱	800
20	復刻 山に描く(繪と文)	足立源一郎	大修館書店	S 53 箱	800
21	復刻 山岳美観	吉江喬松・武井眞澄	大修館書店	S 53 箱	800
22	復刻 富士案内	野中 至	大修館書店	S 53 カバー	800
23	復刻 アルペン行	鹿子木員信	大修館書店	S 50 箱 カバー	800
24	復刻 山 研究と随想	大島亮吉	大修館書店	S 50 箱	800
25	復刻 山行	横 有恒	大修館書店	S 50 箱	800
27	復刻 日本風景論	志賀重昂	飯塚書房	S 54 箱 ※志賀富士男・山崎 安治・猪瀬直樹の「解題」付き	800
28	処女峰アンナプルナ	モーリス・エルゾーグ/著 近藤等/訳	白水社	1954 箱	600
33	星と嵐——六つの北壁登行	レビュファ/著 近藤等/訳	白水社	1955 箱 ※白水社はがき付き	600
38	Neige et Roc ——雪と岩	ガストン・レビュファ/著 近藤等/訳	新潮社	S 38 ビニールカバー	800
39	Entre Terre et Ciel——天と地の間に	ガストン・レビュファ/著 近藤等/訳	新潮社	S 38 ビニールカバー	800
45	アルプス——山と人と文学	近藤 等	白水社	1965 函	800
47	アルプスの名峰	近藤 等	山と溪谷社	1984 カバー	1000
48	アルプスを描いた画家たち	近藤 等	東京新聞出版局	S 55 カバー	800
49	アルプス——近藤等写真集	近藤 等	小学館	S 50 カバー 函 帯	800
50	モン・ブラン山群——特選 100 コース	ガストン・レビュファ/著 近藤等/訳	山と溪谷社	1974 ビニールカバー 函 帯	1000
51	ヴァリス・アルプス——特選 100 コース	ミシェル・ヴォシュ/著 近藤等/訳 ガストン・レビュファ/監修	山と溪谷社	1980 ビニールカバー 函 帯	1000
52	すばらしい世界1——アルプスの自然と人びと	近藤 等・瓜生卓造・風見武秀・他	国際情報社	函	800
61	新田次郎文学事典	財団法人新田次郎記念会/編	新人物往来社	2005 函 帯	1000
62	復刻 辻まこと 山とスキーの画文集	秀山荘	山と溪谷社	2010	1000
63	北ハツ彷徨	山口耀久	創文社	S 51 9 刷 函	1000
64	山とある日	上田哲農	三笠書房	S 42 函	1000
71	上高地	深田久弥・長尾宏也/編	修道社	S 34 再版 函	700
72	世界百名山	深田久弥	新潮社	S 50 3 刷 函	800
75	富士山	白簾史朗	朝日新聞社	1977 函 * 写真集	1500
76	世界の名峰・花巡礼	白簾史朗	新日本出版社	1995 カバー 帯 * 著者署名あり 写真集	1000



平成23年度第8回（11月度）理事 会議事録

日時 平成23年11月9日 19時より
21時10分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】 尾上会長、吉永・西村

各副会長、高原・森・

小林各常務理事、野澤・

中山・永田・節田・志賀・

古野各理事、浜崎監事、

宮崎・橋本各常任評議

員

【欠席】 萩原・川瀬理事、平井監

事

【審議事項】

1・定款施行細則について（高原）

役員および評議員の任期、役員の定年制、終身会員制度について鋭意審議した。次回理事会でも審議することとなった。

（継続審議）

2・上高地山岳研究所における冬山遭難防止対策について（古野）

上高地における気象観測およびアマチュア無線による山岳遭難防止の一助とするため学術研究を含めた気象観測をする。山研建物（ベランダ、屋根等）に無線アンテナ、気象観測機器、カメラ等を設置するほか山研内部のパソコンを通してインターネット、アマチュア無線機に接続して情報提供をする。当該地域は国立公園の特別地区でもあり、極力景観を損なわないよう配色、配線等について相応の配慮をする。今後関係先（環境省、文化庁等）へ許可申請手続きをする。（承認）

3・平成23年度（第13回）秩父宮記念山岳賞について（西村）

今年度は2件の候補推薦があった。10月21日開催の秩父宮記念山岳賞審査委員会における慎重な

審査の結果、受賞該当なし。（承認）

4・『百年史』、『JAN』等の在庫処分方法について（高原）

JAC『百年史』および『Japanese Alpine News』等の刊行物の在庫処分については、総務担当理事が当該刊行物統括委員会等に連絡をとって在庫の圧縮・処分を図る。その分譲価格、広報、手続き等詳細は常務理事会に一任する。（承認）

5・入会希望者について（高原）

11名の入会希望者があった（承認）

【報告事項】

1・各プロジェクト報告

各プロジェクトについての報告があり、とくに①震災復興支援事業PT（宮崎プロジェクトリーダー）は見舞金支給等の作業はほぼ終了であるが、若干の残務がある。端数残金については日赤に追加送金をして「ゼロ」とする。②新法人移行PT（吉永）は10月24日に内閣府に公益法人申請書類を提出した。これからが承認関係折衝の本番である。これに並行してPT

としては諸規程の見直しや新規作成等に鋭意取り組む。

2・公益法人移行申請（吉永）

10月24日に内閣府に申請書類を提出した。来年4月1日付でJACが公益法人として発足すべく折衝の本番を迎えた。追加の資料を求められることもあるだろう。万全を期して行くが支部を含めご支援、ご協力をあらためてお願いしたい。

3・平成23年度名誉会員の推薦（高原）

室賀輝男会員(No.3925、推薦者Ⅱ山崎幸和会員)および平井一正会員(No.4639、推薦者Ⅱ賛田統亜会員)の2名の会員が名誉会員に推薦され、10月25日開催の評議員会で決定された。

4・平成23年度予算上期実績および期中見通し(小林)

収入Ⅱ当初予算 6万4863千円 期中見通し 6万2794千円。入金収入は上期で前期中合計を上回った。引き続き会員増に期待したい。山研収入は夏場の天候、自然災害等の影響で低調であった。支出Ⅱ当初予算6万5363千円 期中見通し 6万3225千円。支出面では予算計上分についてもその執行にあたって効率的支出に引き続き務め、赤字圧縮・改善に繋げたい。

5・山研利用状況および今期年末年始の取り扱い(森)

今年度の収支状況の中での説明のあった通り、天候や自然災害上高地への道路状況等)の影響もあって山研利用は低調であった。昨年は720名の利用であったが今年は496名(いずれも宿泊者数)

と224名の減である。なお、過去数年実施の年末年始の山研利用は諸般の事情を勘案してオープンしないこととする。

6・日本登山医学会からの名義後援依頼受諾(高原)

来年2月20日に開催する招待教育講演「山岳救助―世界の最前線」に対しての名義後援依頼が11月2日付であり、依頼を受諾した。

7・第27回支部懇談会(高原)

10月15・16日、宮城支部担当で開催され、大変盛り上がった集会であった。理事会構成メンバーから5名参加した。東北大学教授による「2008年の地震の栗駒山地の地滑り」についての2時間に及ぶ記念講演のほか、記念山行などが盛大に行なわれた。

8・東海支部50周年記念式典(吉永)

11月5日に記念式典が開催され、マスコミ、県政関係者等200名ほどの来客があり盛会であった。翌日記念山行があった。

9・年次晚餐会(高原)

出席者は現在300名ほどであり、今後各委員会、同好会に出席勧誘をお願いしたい。講演会は予定通り3隊(東海支部の11隊14座登頂、ダットメイン東壁初登攀、ナムナニ南峰南壁初登攀)にお願いしてある。

10・第6回ビオレドール・アジア賞(高原)

今年はカザフスタン隊による「ポペーダ北壁新ルート」による登攀に対して授与された。日本のダッドメイン東壁初登攀についてはゴールデン・クライミングブーツ賞を受賞。

11・中国登山協会来日懇親会(高原)

11月10日18時に当会を訪問される。吉永副会長、川瀬理事が応対する。その後日本山岳協会が加わっての懇親会の予定。

12・山岳団体との懇親会(高原)

日本勤労者山岳連盟から12月2日の「望年会」開催の案内、日本ヒマラヤ協会から12月10日の「華甲望年会」開催の案内があった。

13・年末年始のルームの閉室(高原)

12月29日(木)～1月5日(木)の間、ルームを閉室する。

14・会報「山」11月号編集報告(節田)

ル ーム 日 誌

11月

1日	図書委員会 スケッチクラブ
2日	集会委員会 フォトビデオクラブ みのり山の会
4日	常務理事会
5日	全国山岳博物館連絡会議
7日	総務委員会 スケッチクラブ 高尾の森づくりの会
8日	山岳研究所運営委員会
9日	理事会 休山会 山想倶楽部
10日	山の自然学研究会 山の日 制定PT 山岳地理クラブ
14日	スキークラブ
15日	図書管理 青年部 00会
16日	三水会 つくも会
17日	科学委員会 支部活性化PT
19日	緑爽会
21日	総務委員会 資料映像委員会
22日	ゆきわり会 スキークラブ
24日	自然保護委員会 山遊会
25日	JAC-YOUTH
28日	総務委員会
29日	JAC-YOUTH 海外委員会

■懇親山行は箱根・神山～駒ヶ岳

12月4日の懇親山行は集会委員会が主催し箱根・神山～駒ヶ岳で行なった。前日と打って変わって好天に恵まれ、参加者は100人を超えた。尾上会長も参加した。JR品川駅に午前7時集合し、バス2台で出発、ロープウェーで駒ヶ岳へ。雲なく風もなく、目の前に大きな富士山が迫ってくる。記念写真を撮った。富士は真っ青な空によく映えた。バスは大涌谷を2時半に出発し下山した。

30日 麗山会

11月来室 501名

会員異動(11月)

物故

皆川完一(2844) 11・10・28

片岡博(7497) 11・11・5

吉川勝秀(8657) 11・9・10

退会

伊藤敦(10022) 信濃

伊藤泰子(10023) 信濃

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
孫慶錫	韓国登山史	734p / 27cm	E Mountain	2010	著者寄贈
吉永英明 他 (編)	ブータンヒマラヤの自然と登山—千葉大学のヒマラヤ	111p / 30cm	千葉大学学土山岳会	2011	発行者寄贈
日本山岳文化学会 (編)	顕彰碑にみる人物登山史	278p / 22cm	日本山岳文化学会	2011	発行者寄贈
一等三角点研究会 (編著)	登山案内 一等三角点全国ガイド	259p / 21cm	ナカニシヤ出版	2011	編著者・出版社寄贈
飯田年穂	語りかける山	316p / 20cm	駿河台出版社	2011	著者寄贈
太田五雄	ヒマラヤの氷峰—ヒマラヤ50年の追想	172p / 21cm	南方新社	2011	著者寄贈
太田五雄	悠久の屋久島—太田五雄 山岳記録写真集	162p / 21cm	南方新社	2011	著者寄贈
薬師義美 (編)	ヒマラヤ文献目録[新選]	1275p / 26cm	薬師義美(私家版)	2011	著者寄贈
徳久球雄 他 (編)	三省堂日本山名事典	1216p / 22cm	三省堂	2011	出版社寄贈
沖允人 (編)	インド・ラダック マリ峰(6585m)初登頂—帰国報告書	66p / 30cm	栃木県南地区山岳協議会	2011	発行者寄贈
辻岡正美 (編)	山想—日本山岳会福井支部創立20周年記念号	125p / 26cm	日本山岳会福井支部	2011	発行者寄贈
山と溪谷社 (編)	山と溪谷—1・2・3 選集(ヤマケイ文庫)	382p / 15cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
近藤信行 (編)	山と溪谷—田部重治選集(ヤマケイ文庫)	382p / 15cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
長野県警察山岳遭難救助隊 (編)	レスキュー最前線—長野県警察山岳遭難救助隊	286p / 19cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
小学館 (編)	NHKグレートサミット世界の名峰 (DVD & Book) 全10巻	/22cm	小学館	2011	出版社寄贈
Stephen Goodwin (ed.)	The Alpine Journal 2010/2011 (Vol.115 No.359)	498p / 23cm	The Alpine Club	2011	発行者寄贈
D.O.A.	Alpenvereinsjahrbuch BERG 2012 (Band 136)	255p / 27cm	D.O.A.	2011	発行者寄贈



インフォメーション

◆第29回図書交換会

図書委員会

毎年3月に開催している図書交換会を平成24年は2月に開催します。出品目録は14～15ページに掲載、ご参照ください。

日時 平成24年2月18日(土)

・13時より購入申し込み・抽選を開始します。

・12時から本の内覧ができます。じっくり本を選びたい方は早めにご来場ください。

場所 山岳会104号室

問合 三好まき子

TEL 090-8019-8601

E-mail 344mm@mbe.nifty.com

◆団体傷害保険募集方法の変更

財務委員会

平成24年2月1日から28日まで平成24年度団体傷害保険募集を行います。詳細は次号に譲ります

『山岳』の原稿募集

本会の機関紙『山岳』第百七年(2012年)の発行は、第百六年と同じく6月初旬を予定しております。原稿締め切りは3月末日となりますが、会員の皆さんからのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、編集委員会に一任させていただきます。

できればメールでのご連絡、ご出稿をお願い申し上げます。なお、締め切りは3月末日。

[送り先] 〒274-0073船橋市田喜野井2-1-4 節田重節

☎047-476-1273 E-mail j-setsuda@ray.ocn.ne.jp

(『山岳』担当理事・節田重節)

が、すでに加入されている方は、例年通り案内書を送ります。コースの変更、継続停止、ご家族の追加、住所変更のある方のみ、同封の加入依頼書に必要事項を記入のうえ、返送ください。

資料請求先は藤田あて、TEL 011-611-8008、FAX 011-2011-611-8008

会報『山』目録の発行について

会報『山』自751号～至800号(2007年12月～2012年1月)の目録は、2012年4月の発行を予定しております。通常より2カ月遅れでの発行になりますが、なにとぞご了承いただきたくよろしくお願いいたします。

(会報編集委員会 神長幹雄)

011-611-8009へ

◆ウメサオタダ才展開催

梅棹忠夫の業績を展示するウメサオタダ才展が開催される。

期間 12月21日(水)～2012年2月20日(月)

場所 日本科学未来館

問合 TEL 03-3357-0915

◆編集後記◆

●今年の年次晩餐会も、盛況のうちに開催されました。1年の締めくくりとして、とても和やかな会になりました。総務委員会の皆さんには、本当にご苦勞様でした。

●私事ですが、年末にちよつと体調を崩し、ご迷惑をお掛けしました。

●会報を編集していると、一年のたつのがとても早く感じられます。特に今年はそうでした。大変お世話になりました。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 799号

2011年(平成23年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社